

## 代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。まだまだ30℃を超える日が続く今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。先日までフランスパリで行われていたオリンピック、日本のメダルラッシュの興奮冷めやらぬ中、私が注目したのは、女子陸上やり投げで、フィールド種目初の金メダルに輝いた【北口榛花（きたぐち はるか）選手】に注目しました。北口選手といえば、トレードマークの笑顔が印象的な選手ですが、オリンピック最後の投てきを終えたあとは涙を流していました。小さい頃からスポーツ万能だったようで、競泳やバトミントンなども全国レベルの選手で、高校時代からやり投げを始めた北口選手は1年でインターハイを制し、ジュニア世界選手権で優勝して注目を集めるようになりました。やり投げで生きていきたいと考えようになった北口選手でしたが、元バスケット

ボール実業団でプレーしていた母親からはスポーツで生きていく事の厳しさから、反対されたとの事です。娘には先の見えない人生より安定した道に進んでほしいと願う母の思いを知った北口選手は、『同じ道を歩むことになってごめんなさい』と伝えたといいです。

この時、一緒に涙を流してくれた母の思いに応えるため、【やるからには世界のトップを目指す】と揺るがない覚悟を決めたそうです。活動拠点をやり投げ強豪国のチェコに移し、血と汗のにじむ毎日を送り、今回の結果につながったのだと思います。

やはり輝かしい成績の裏には色々な苦難があり、それを乗り越えた選手に結果が付いてくるのだと感じました。すべての努力が報われる事のない、厳しい世界【勝負の世界】で勝利を信じ、毎日毎日努力をしているすべてのアスリートの皆様へ脱帽の思いです。日本を代表して全力を尽くしたすべての選手に『感動をありがとう』と伝えたい気持ちでいっぱいです。

まだまだ暑い日が続く今日この頃ですが、皆様くれぐれもご自愛ください。

## サンライズの物語

### 介護職に携わり——

### 亡き母の想いについて考える物語



介護職に携わってから生るという事や死後の事を考えるようになったのは私だけではないと思います。

その人の生き方が死に方という考え方もあると思います。肉体的に死が訪れたとしても魂はまた次の世代へと生まれ変わると信じています。

私自身亡くなった母の言葉を思い出さない日はありません。母が私たち子どもを育てる為に教えた世の中の摂理……

「お天気に文句を言ってはいけない」「人に何かを頼まれたら気持ちよくやりなさい」「自分に関わった人たちや子供を大切になさい。やがて自分を助けてくれる」「道ですれ違った人にも親切になさい」親は自分の子供の成長を最後まで見届けられないことを知っています。

自分の子供が世間で生きやすいように、辛い思いをしないようにと毎日願いを込めて話していたのではないかと自分が親になってみて初めて分かることだと思います。

親の思いは果てしなく愛情に満ちています。年を重ねできない事が増えていき他の人達に助けて貰わないと生活が成り立たなくなる辛さ……

若い時には考えもしない事です。そんな皆様の想いに寄り添う介護職でありたいと考えます。

# サンライズのデイサービス陽光だより



**お誕生日** 皆さんでお誕生日の歌を歌って誕生日カードをプレゼントさせて頂きました。おやつに手作りパンケーキをお出しました。



**カレンダー製作**  
折り紙と色画用紙でキンモクセイの花を作り画用紙に飾り付けて作りました。



## NEWS 今月のニュース

### 母国の味で 輪島に元気 ウクライナの親子ら 炊き出し きょうあすも開催

「明るい気持ちになってもらえれば」

ロシアによるウクライナ侵攻の影響で日本に避難しているポジダイエバ・アンナさん（51）、リサさん（17）親子が10日、能登半島地震で被害を受けた輪島市大野町の大野仮設団地の集会所で母国料理を提供した。（協阪憲）

アンナさんとリサさんはシャツに細かい刺しゅうを施したウクライナの民族衣装「ピシバンカ」を着て、夏によく食べられるというチキンスープ、マカロニとミンチ肉などをトマトソースで炒めた家庭料理2品を70食分振る舞った。仮設住宅で1人暮らしする畠中寛さん（79）は「おいしいね」と笑顔を見せ、「自分で料理する手間が省ける。遠

くから来てもらってありがたい」と感謝した。

首都キーウ（キエフ）出身。経営していた美容サロンの入るビルがミサイル攻撃を受けるなど身の危険を感じ、2022年12月に家族4人で佐賀県に避難した。昨年8月から東京で生活する。

「家族を受け入れてくれた日本人に恩返しをしたい」と、日本各地を回り、料理を振る舞いながら母国の文化や経験を伝える催しを企画していたアンナさん。だが元日の地震で中断し、被災地への支援を決めた。

市内を見たアンナさんは被害状況に「びっくりした」と印象を話し、リサさんは「明るい気持ちになってもらえれば。ウクライナのことも知ってほしい」と話した。

炊き出しはアンナさんが理事を務め、日本で暮らす外国人を支援する団体「多文化人材活躍支援セン

ター」（佐賀市）が主催。佐賀女子短大で介護を学ぶミャンマー人留学生らも協力している。11日は避難所になっている輪島市の大屋小、12日は同市横地町の横地仮設団地で振る舞う。



<中日新聞 2024/8/11（日）>

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。 <http://www.samaba.jp/back-number/>